

鳥取県環境学術研究等振興事業費補助金研究実績報告書

研究期間（ 1年目/ 3年間）

研究者 又は 研究代表者	氏名	(ふりがな) のつ あきこ 野津 あきこ
	所属研究機関 部局・職	鳥取短期大学 生活学科食物栄養専攻 教授 電話番号 0858-26-1811 電子メール akknt@ns.cygnus.ac.jp
研究課題名	【地域振興部門】 鳥取県市町村における食育・健康施策策定のための調査研究	
研究結果	<p>【調査目的】市町村レベルでの健康寿命の延伸を目標とした効果的な食育・健康施策を策定するための基礎資料を得ることが目的である。また本調査は行政調査として実施する。栄養調査の結果については、希望する住民には結果の返却を行い、食生活改善に役立ててもらおう。</p> <p>【調査時期及び対象地区】鳥取県南部町は平成29年9月～12月（質問票の郵送及び回収）実施した。鳥取県岩美町は平成30年度実施に向けて準備中である。</p> <p>【調査方法及び内容】BDHQ等自記式の質問票及び食育に関するアンケート調査を郵送法で実施する（BDHQ：簡易型自記式食事歴法質問票）。また承諾を得られた住民を対象として、健診データ等との連結を行い健康課題の抽出や関連性についての研究も予定している。</p> <p>【参考として県外の対象地域】健康課題と栄養・生活習慣の関連を検討するために、鳥取県と共通の健康課題を抱える福島県を参考地域として調査を行う準備をすすめている。</p> <p>【回収率等】南部町；食育アンケート4,452名中1,145名（男510名、女635名）25.7%、BDHQ 984名（男434名、女550名）22.1%の有効回答率であった。</p>	
研究成果	<p>1. 平成29年度は鳥取県南部町等の食育・健康施策策定のためのアンケート調査・集計を行った。現在、施策策定に向けて作業中である。平成30年度は岩美町でも調査実施を予定している。</p> <p>2. 鳥取県市町村の特徴的な生活習慣病等の健康課題（結果）に関連した食事・栄養及び生活習慣に関する課題（原因）を抽出するための基礎資料を得た。課題抽出のためには、対象者数を増やす必要があり、平成30年度も県内1町（岩美町）と県外1町（福島県広野町）を調査対象地区として実施準備中である。</p>	
次年度研究計画	<p>南部町で実施した調査の詳細なまとめを行い、個人結果の返却を行う。また食育施策に向けた検討を行う。</p> <p>鳥取県岩美町を対象としたBDHQ等自記式質問票調査（郵送法）を行う。</p> <p>福島県広野町住民を対象としたBDHQ等自記式質問票調査（郵送法）を行う。</p> <p>福島県会津若松市のBDHQ等質問票による調査報告オープンデータの活用を検討を行う。</p>	
報告責任者	所属・職 氏名	鳥取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター 西垣ちひろ 電話 0858-27-0107 電子メール nishigaki@ns.cygnus.ac.jp

注1) 表題には、環境創造部門、地域振興部門、北東アジア学術交流部門のいずれかを記載すること。

2) 「研究期間（ 年目/ 年間）」及び「次年度研究計画」は、環境創造部門及び地域振興部門において記載すること。

3) 研究者の知的財産権などに関する内容等で、非公開としたい部分は、罫線で囲うなど明確にし、その理由を記すこと。

4) 研究実績のサマリー及び図表資料を併せて提出すること。

鳥取県市町村における食育・健康施策策定のための調査研究

野津あきこ（鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻）

【背景】

鳥取県は、急性心筋梗塞の都道府県別年齢調整死亡率（平成27年厚生労働省調査データ）から男性が福島県、高知県、岡山県に次ぐ4番目、女性は福島県、鳥取県、高知県と2番目のワースト県である。心筋梗塞の危険因子は高血圧、脂質異常、喫煙、糖尿病等が知られているが、それら危険因子は生活習慣や栄養摂取との関連があることが国内外の疫学研究等で証明されている。鳥取県では県民栄養調査（国民健康・栄養調査方式）が5～6年間に1回程度実施されており、平成28年度も国民健康・栄養調査に含める方式で県民栄養調査が実施された。しかし過去に実施してきた県民栄養調査では健康課題の原因となる生活習慣や栄養素等摂取状況及び食品群別摂取状況結果は鳥取県の健康課題となる要因を明確に示すことができていない。しかし高齢化が進み、健康寿命の延伸を目標とした効果的な食育・健康施策を策定するためには、鳥取県の健康課題（結果）と栄養・生活習慣（原因）の関連を示すことは急務となっている。本研究は栄養調査等測定方法の標準化及び調査データの統計解析により、市町村レベルでの食育・健康施策に盛り込める健康課題と栄養・生活習慣の関連が明らかになることを目的としている。

【対象及び方法】

対象地区および対象者数は、鳥取県N町の地域住民4,452名（20歳代～75歳以下）を対象とした。有効回答率は、食育に関するアンケートが25.7%、1,145名（男510名、女635名）、BDHQ（簡易型自記式食事歴法質問票）が、22.1%、984名（男434名、女550名）であった。郵送法で実施した。なお、対象者本人を特定できる情報（氏名、住所、電話番号等）はN町健康福祉課が保管し、研究のための個人データ解析はすべてID化したものを用いた。

【結果】

食育に関するアンケートから、朝食を毎日食べているのは、全体で88.6%であった。60歳代は95.5%、70歳代が97.8%の人が食べていたが、20歳代では68.7%、30歳代では77.0%と若い年代では、朝食を欠食するひとが多い傾向がある。間食については、全体で59.0%の人が1日1回以上とっている。すべての年代で女性のほうが多くとる傾向がある。「主食・主菜・副菜がそろった食事を毎食しているか」については、20歳代では11.5%と低く、70歳代では38.5%と年代が上がるにつれて主食・主菜・副菜がそろった食事をしていた。「普段の食事を意識しているか」については、20歳代は54.2%、70歳代は83.3%であった。全世代で女性のほうが意識していると答えた人が多かった。意識する内容としては、「野菜をとる」が多く、意識している人の86.1%が選択していた。その他、「塩分を控える」と回答していたのが、20歳代では13.3%であったが、年代が上がるにつれて多くなり70歳代では74.2%が意識していると回答していた（図）。また50歳代から70歳代の女性は、「カルシウムを多く含む食品をとる」と50%程度の人が回答していた。BDHQによる栄養素等摂取状況では、20歳代女性がカルシウム、鉄、ビタミンB1、ビタミンCなど摂取量及び栄養素密度ともに他の年代・性別に比べ低い傾向がみられる。食品群別摂取量では、野菜類は、年代が上がるにつれて多くとる傾向がある。ただし、20歳代男性は302gと60歳代、70歳代と同様に多くとっていた。30歳代、40歳代の女性は魚の摂取量が低かった。肉類は、年代が上がるにつれて摂取量が減ってくる。菓子類は30歳代から50歳代の女性が多くとっている。

【まとめ】

食育アンケートの結果から、若い世代の「朝食欠食」や「主食・主菜・副菜がそろった食事をしていない」、「普段の食事を意識していない」などの課題がみられた。特に20歳代女性では、カルシウムや鉄、ビタミンB1、ビタミンCなどの栄養素等摂取量が、他の年代・性別と比較して低い傾向がみられる。今後は、食育アンケート（意識）とBDHQ（実際の摂取量）と関連付け、性・年代別の食に関する課題を整理し、健康づくりのための施策策定にむけて検討を進めていく。

